

絵本における心的状態語の自他志向性に関する日英比較

田口 俊哉

【序論】

人は日常生活において自他の様々な心的状態に触れており、これらに関する親の語りは児の発達早期の社会化において重要な役割を果たす(Ebert et al., 2020)。特に、親は子どもの発達初期から絵本を読み聞かせており、絵本は多様な心的状態についてのインプット源となっている(Farkas et al., 2020)。本研究では、日英絵本における心的状態語について調べ、児の発達を支える絵本の文化的特徴を明らかにすることを目的とした。

文化的価値観の代表的な違いとして、西欧圏は個人主義であるのに対し、東アジア圏は集団主義である点が挙げられる。個人主義とは、自己の概念は他者から独立したものであるという相互独立的自己観を持ち、個人の目標達成が重視される思考である。一方、集団主義とは、自己の概念は他者との関係の中で形成されるものであるという相互協動的自己観を持ち、社会との調和が重視される思考である(Markus & Kitayama, 1991)。こうした文化差は絵本にも反映されており、西欧圏の絵本では誇り、嫉妬など自己を尊重した情動が、東アジア圏の絵本では尊敬、罪悪感など他者との相互関係を尊重した情動が多く描写される(Wege et al., 2014; Farkas et al., 2020)。

一方、Wege et al.(2014), Farkas et al.(2020)は情動に関する描写を、情動の種類のみで弁別しており、その情動が自己に向けられたものであるのか、他者に向けられたものであるのかは明らかにしていない。絵本における個人主義と集団主義の文化差を正確に検討するためには、情動の自他志向性を文脈に応じて確かめる必要がある。本研究では、発達初期から児が触れる絵本の情動語にも自他志向性の文化差が反映されているのかを明らかにし、自己を尊重する個人主義と他者を尊重する集団主義という異なる文化的価値観が共有され、学習されるプロセスの一つを示すことを目的とした。

本研究では、第一に、絵本における情動語の自他志向性に日英で文化差がみられるのかを検討した。第二に、自他志向性の文化差は他の心的状態語である認知語でも同様にみられるのかを検討した。本研究では、英語絵本では自己志向的な心的状態語(情動語・認知語)が多く、日本語絵本では他者志向的な心的状態語が多いと仮説を立てた。

【方法】

本研究は NTTCS 研の協力の元、日英 8000 冊以上の絵本データを網羅した絵本コーパスを用いて行った。そのうち、物語として描かれている日英絵本各 50 冊を分析の対象とした。

対象の絵本における情動語を全て抽出し、それぞれについてポジティブな語かネガティブな語かを判断した。また、情動の対象・原因が自己にある語を自己志向的な情動語、情動の対象・原因が他者にある語を他者志向的な情動語として分類した。同様に、対象の絵本における認知語を全て抽出し、それぞれについて自他志向性を判断した。なお、情動語についてはニュートラルな語及び自他志向性の判断ができないもの、認知語については自他志向性の判断ができないものは分析の対象外とした。

【結果】

情動語の 100 語当たりの語数及び種類について日英絵本で差がみられるのかを調べるため、マンホイットニーの U 検定を行った結果、語数・種類のいずれについても有意な差はみられなかった($U=1472$, $p=.17$; $U=1401$, $p=.22$)。一方、認知語の 100 語当たりの語数及び種類について日英絵本で差がみられるのかを調べるため、マンホイットニーの U 検定を行った結果、語数・種類のいずれも日本語絵本より英語

絵本で有意に多かった($U=372, p<.001$; $U=277, p<.001$)。

絵本における情動語の志向性に文化差がみられるのかを検討するため、言語(日本語・英語)、情動価(ポジティブ・ネガティブ)を説明変数、自己志向的な情動語の割合を応答変数とする GLMM 及び尤度比検定を行った。その結果、言語の主効果($\chi^2(1)=11.43, p<.001$)、情動価の主効果が有意であった($\chi^2(1)=11.29, p<.001$)。言語×情動価の交互作用はみられなかった($\chi^2(1)=1.23, p=.27$)。事後検定の結果、日本語絵本は英語絵本よりも、自己志向的な情動語の割合が有意に低かった($\beta=-0.63, p<.001$)。また、ポジティブな情動語はネガティブな情動語よりも、自己志向的な情動語の割合が有意に高かった($\beta=0.44, p<.001$)。

絵本における自他志向性の文化差が情動語に限定されるのか、他の心的状態語である認知語でも同様であるのかを検討するため、言語(日本語・英語)、語の種類(情動語・認知語)を説明変数、自己志向的な語の割合を応答変数とする GLMM 及び尤度比検定を行った。その結果、言語の主効果が有意であったが($\chi^2(1)=11.29, p<.01$)、語の種類の主効果はみられなかった($\chi^2(1)=0.34, p=.56$)。言語×語の種類交互作用はみられなかった($\chi^2(1)=1.73, p=.18$)。事後検定の結果、日本語絵本は英語絵本よりも、自己志向的な語の割合が有意に低かった($\beta=-0.53, p<.001$)。

【考察】

絵本における情動語の語数・種類について日英の文化差はみられなかった。情動語は他者の心的状態について理解するための基本的な語彙として、少なくとも西欧圏と日本では絵本の中で同様に強調されている可能性がある。一方、英語絵本は日本語絵本よりも認知語の語数・種類が多かった。英語絵本では明確に登場人物の認知について言及されている一方、日本語絵本ではしばしば背景情報から登場人物の認知を読み取る必要がある。絵本におけるこうした認知語の文化差は、日本の児がアメリカの児よりも心の理論の獲得が遅れている要因となっている可能性がある(cf. Naito & Koyama, 2006; Wellman et al., 2001)。

情動語の志向性について分析を行ったところ、文化に関係なく、ポジティブな情動語はネガティブな情動語よりも自己志向的な語の割合が高い、つまり、ネガティブな情動語はポジティブな情動語よりも他者志向的な語の割合が高かった。絵本において他者志向的なネガティブな情動が生じる他者とのいざこざ場面を描くことで、児は実際の他者との対立場面にどう対処すべきかを学ぶことができると考えられる。

また、ポジティブ・ネガティブに関わらず、日本語絵本は英語絵本より自己志向的な情動語の割合が低い、つまり、英語絵本は日本語絵本より自己志向的な情動語の割合が高く、日本語絵本は英語絵本より他者志向的な情動語の割合が高かった。本研究では情動語の自他志向性に注目することで、個人主義の文化圏では自分自身に焦点を当てた情動を強調し、集団主義の文化圏では他者に焦点を当てた情動を強調するという文化差が絵本にも反映されていることを明らかにすることができた。

同様に、心的状態語(情動語・認知語)の自他志向性について日英比較を行ったところ、語の種類に関わらず、英語絵本では自己志向的な割合が高く、日本語絵本では他者志向的な割合が高いことが明らかになった。絵本における情動語・認知語のいずれの心的状態語にも文化特有の自他志向性が内包されており、発達初期からそれらに触れることで、個人主義と集団主義という異なる文化的価値観が伝達されている可能性が示唆された。

以降の研究では、本研究のコーディングの信頼性・妥当性を確保するとともに、絵本を用いた母子インタラクション場面について日英比較を行うなど、絵本の内容と実際の児の発達との関連について実験的に検討する必要がある。(比較発達心理学)